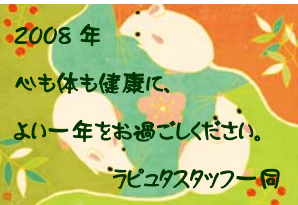




ラピユタ通信

【発行】
特定非営利活動法人
ラピユタ創造研究所
〒915-0074 福井県
越前市蓬萊町5-1
TEL 0778-21-3190

新年明けましておめでとうございます



皆さん、2008年。心新たにすがすがしい年の初めを迎えていらっしゃると思います。

歳を重ねるごとに、日々が過ぎるのが格段に早る気がします。毎日、仕事・イベント・その他浮世のもろも

ろに追われ、あっという間に年明け。お陰さまで、スタッフ一同なんとが無事に2008年を迎えることができました。

空からみた「蔵の辻」 界限に思う

昨年11月に小型軽飛行機に乗って、「蔵の辻」界限を鳥の目線で眺める機会に恵まれました。私達が乗ったのは、ガルフストリーム・エアロスペースAG-5B、愛称は「タイガー」。小型軽飛行機は、イコール「セスナ」だと思ひ込んで



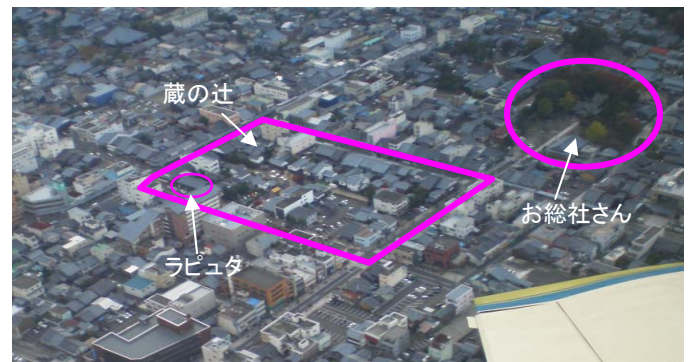
タイガーの艶姿

だけれど、それはメーカーの名前でした。今回は「紅の豚」みたいにして口でかわいい姿のタイガーに乗って、気持ちよく空を飛んできました。(はてさて、次回はあるのか?)

兵庫県但馬まで行った帰り、日野山の頂上を通過し、武生の街中に向かって飛行してもらいました。蔵の辻が、そしてラピユタが手に取るように近くに見えてきました。「蔵の辻」では『壺の市』(毎月第一日曜日のマーケット)が開かれているところが見えました。ラピユタのスタ

ップも出店中です。その奥には瓦屋根の町並みが広がって見えます。わー、武生だ! その後、駐車場で歯抜けになった町並みと、少ない緑に、啞然。なんとなく気づいてたけれど。。

毎日暮らしている場所を客観的に見ることで、改めて武生の街中に静かな愛情がわいてくるのを感じました。経済・文化・環境が程よく保たれる街で、笑顔で、心に贅沢な暮らしができればいいな。。歳をとってもね。



おもちゃのような蔵が並び「蔵の辻」

■今年のラピユタ、転機の年を迎えます

今年で活動10年目に入るラピユタ。活動当初の1999年頃と比べ、蔵の辻界限にも新しいお店や街の担い手が増えました。武生の街中を取り巻く社会的状況も、良くも悪くも変化しました。そして今、ラピユタのはたすべき役割も、変化してきているように感じています。

ラピユタはラピユタらしく、ラピユタだからできることを見つけ、今年も一歩一歩前向きに歩いていきます。さあ、朝まで討論会をやらなくっちゃね! そんな試行錯誤のラピユタの2008年です。

皆さん、今年一年よろしくお願いたします。

otonaの文化祭「まちさん」上演を振り返って

昨年のotonaの文化祭では「まちシリーズ」第3弾「まちさん」を、府中町屋倶楽部にて上演させていただきました。来場いただいた方ありがとうございました。3年前から始めた「まちシリーズ」ですが武生の街中の変遷を題材に書いてきました。今回はお祭りを題材にした内容です。

宮本常一著「忘れられた日本人」が好きなのですが、その中で地域にはその地の歴史や風土に根ざした細かな祭りがあったが、明治に入り中央集権化が進むにつれ失われていったという記述があります。07年をはじめからの継体天皇がらみのお祭り騒ぎを見ると、地域性を感じさせない漠然とした大きなお祭り騒ぎに、同じものを感じました。それと「旅の恥は掻き捨て」という言葉は名前の知られていない旅先では何をしてもかまわないということですが、武生という名前を捨てたことでこの地域に起こっているのではないかと、2つの切り口で書いてみました。

元々はもっと架空な雰囲気やシニールな芝居をしていたのですが、武生に活動を移しラピユタの活動に加わる中で地域の課題を面白おかしくお芝居にしようと考え、まちシリーズを始めましたが3部作はとりあえず「まちさん」でおしまい。次回はもっと違う切り口・見せ方で街話をラピユタ風にできたらなと思っています。



劇団13番街・ラピユタ理事 木下駒

ラピュタ
農場

100円ショップのにんじんの種で大収穫！



昨年の夏場は不慣れなスイカの栽培で疲労困ぱいの農場プロジェクト。秋には何を育てようか。。。と、ぐずぐずして見つけた100円ショップの野菜の種シリーズ。手に取ったにんじんの種を10月初旬にばらばらと撒き、あとは天の恵のみ。「otonaの文化祭」や他の企画に追われ、久しぶりに足を運んだ農場で目にしたものは、たくましく育つにんじん達！密集するにんじんの間引き。写真のとおりかなりの量になりました。やわらかい葉っぱを

丸ごと使ったキンピラは、栄養満点、おいしさ◎。さあ、今年はどうなる農場プロジェクト。ただいま、スタッフ募集中。羊飼いは(?) 志願者も募集してます。(マジ)

新年早々
マジなつばやき

武生にも忍び寄る地域間格差

武生と東京の差が拡大している。量的差だけではない、質的差がついてきた。一般的に格差社会とは、今まで中流層にいた人たちが下流層に移行し、また、上中流層の一部が超上流に移行して、大きな格差が生じた社会である。

ところが、この武生で住んでいると、そんな圧倒的な差のある格差社会が出現しているとは感じられない。それは武生が、格差社会をもたらす主原因であるグローバル化の波から置き去りにされているので地域内格差がそれほど顕著に現れてはいないからである。

一方、地域間格差、特に武生と東京を比較した場合の格差は、拡大している。昭和30・40年代の高度成長期には、地方から都市への人口大移動があったが、このときは、働き口がなく、所得の貧しい人々が地方から、働き口のある都会へ流出し、結果として所得の地域間格差を縮小する効果が生じた。ところが今は、グローバル化の波から置き去りにされた武生のような地方から、豊かな者が資金とともに都会に流出して、地域間格差が拡大しているのである。武生でも世の中の動きに敏感な会社や人は、東京へのビジネス移動を始めている。その結果、東京は経済的にますます豊かになり、社会の仕組みや住民のライフスタイルといった質的な差が、武生とはついてきた気がする。

武生に住む私たちは、今後、ますます、自分たちの立ち位置を分析し、確認し、武生ならではのライフスタイルを確立する必要性が増してきた。

2008年度会員は、4月～来年3月まで

正会員 10,000円/年 賛助会員 3,000円/年

詳しくはラピュタまでお問合せください。

コラム第2回 発掘で勝負！

国府の所在地を特定するのに発掘は欠かせない。初期越前国府があった「太介不(たけふ)」は、武生だ、敦賀だ、いや味真野(あじまの)だと言っても、実は状況証拠をあれこれ言い合っているだけで物的証拠はどこにもない。この場合の物的証拠とは、当時の国衙(こくが)の柱跡とか「太介不(たけふ)」と書かれた木簡(もっかん)や墨書土器(ぼくしよどぎ)などである。越前市教育委員会の学芸員から中心市街地での国府に関する発掘状況を聞いたが、初期国府どころか、国府が武生に確実に存在したと誰もが認めている八〇〇年以降の国府の跡も実はまだ見つかっていない。これでは、敦賀や味真野に付け入られる隙を与えてしまうのではないか。

さらに困ったことに、昔から神主系の知識人は平気で歴史を捏造し、後世の人を混乱させてきたりしがあつた。江戸時代末期に気比神宮の神官石塚資元が著した「敦賀志」には、「道口など八村を武生の郷(こおり)という」と書かれている。一方、武生にある御霊(ごりょう)神社の縁起書には「越前国竹生郷(ごおり)鎮座」とあり、総社大神宮の由緒書には「竹生ノ国府」と見える。これらはいずれも、平安時代の流行歌集「催馬楽(さいばら)」の「太介不乃己不(たけふのこふ)」から考証して我田引水的に「太介不(たけふ)」は敦賀だ、武生だと言っている。どちらか、あるいは両方が嘘を書いている。

最近の継体天皇即位千五百年記念の各種イベントを見ていると同様な「危なさ」を感じる。新聞も、ケーブルテレビも、市の広報紙までもが継体天皇の地元での言い伝えを歴史的事実であるかのごとく報じている。これらの言い伝えは江戸時代の国学者や神主などの知識人が捏造した可能性が高いが、市民に情報リテラシー能力がないと、これらのことを事実として思い込んでしまう。これは商業ベースのPR活動ではよく使う手であるが、それを歴史に適用することは禁止手だと私は思う。

国府論争は、発掘で勝負をつけるのがよい。ある日散歩に出かけた私は、発掘に適した場所はないかと寺町界隈をさまよううちに最近家屋を解体したばかりの空き地に出た。そこは私が四十年前に発掘したことのある深草廃寺跡の近くだったので、もしかして土器のかけらでも見つからないかと探し回ること数分、地上に半分露出した小さな布目瓦を見つけた。発掘マニアであった少年のとき、この古代瓦をいくつ掘り出したことか。歴史遺物の缶詰の上で暮すような武生なら、やつぱり、国府論争は発掘で勝負だ、と思った。

ラピュタ理事 井上和治

※このコラムは、中日新聞・日刊福井の「越前春秋」に掲載されたものです。次号では、第3回を掲載します。

私たちは、持続可能な地域社会をめざします



Laputa

〒915-0074 福井県越前市蓬萊町 5-1
TEL 0778-21-3190 FAX 0778-21-0676
e-Mail info@laputa21.com
ホムンジ http://laputa21.com/